
アニマル ワンダフルライフ

鬼蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニマル ワンダフルライフ

【Zコード】

Z0395F

【作者名】

鬼蝶

【あらすじ】

ある日を境に、人が動物に見えてしまった、主人公の斎宮侑生。次々と襲いかかってくるハプニング（？）に、侑生は耐えられるのだろうか？

第1話 俺はこんな世界、嫌だあああーー（前書き）

日本語が変だつたり、違和感があつたりするかもしませんが、
これは許してやつて下さい。

第1話 俺はこんな世界、嫌だあああ！！

どーしてなんだ？どうして、動物がいるんだよ？

俺は電車から、真っ先に降りた。

「やつてられつか、こんな生活！－！」

俺の名前は、斎宮 侑生。高校1年生だ。

最近、人が動物に見えてしまう。中学校までは、普通に人が見えていたんだが・・・。頭でも可笑しなったんじゃねーか？と、お思いの人も居ると思うが、本当なんだよ。ほら、今も駅の女子トイレから、カバが・・・。

「何、見てるのよ！－！」

「ああ、すいません。」

しかも、ちゃんと喋る。さつきの人は、声と歩き方からして、45歳位かな・・・。

「つて、学校に遅れる。」

推測してる暇はないと、俺は急いで学校に向かった。

「いつになつたら、元の世界に戻るんだ？」

「おーい、斎宮！－！」

・・・は？

馬だ。馬がこっちに向かつて走つてくる。

「うわ、来るな。」

俺はとっさに、頭を伏せた。

「おはようー！・・・何、してんだ？」

馬が2本足で立つてゐるつひつひつひ。

「お、おはよう。何でもないよ。」

いけね・・・平常心、平常心・・・って、誰だっけ？

「えーと、どちら様で？」

馬だ。

「何、言つてんだよ、友達の顔も忘れたのか？」

馬だ、馬だ、馬だ、馬だ、馬だ。

「ああ、宗村だよな。分かつてゐる、分かつてゐるとも。」

「青樹だけど。」

シーン・・・。

ま、間違えた――――――!

どうじょう。沈黙が・・・。

「冗談だつて――!冗談位、軽く受け止めりよ。な?」

「・・・うん。」

落ち込んでゐる。これ、絶対に落ち込んでゐる。鼻がモヒモヒしてゐるもん。

ああああああああ、コイツ面倒くセー――!超、面倒くセーよ――!声だけで分かるかつての――!

第2話 やべえ、宇宙人が来たんだけど…！

「つたく、なんで朝からこんな、疲れんだよ。」

俺は屋上で、昼食を食べていた。

「斎宮、聞いたか？」

もちろん、馬・・・いや、青樹も一緒に。

「何を？」

青樹は柵から、運動場を見下ろした。

「今日、美人の転校生が来るらしいよ？」

「美人だ？」

なんだ？ ゴールデンレトリバーでも、来るつてか？

「お、来たみたいだ。」

あんまり、期待しない方がいいだろ？ な・・・。

「すげー！！ 美人だ！！」

へえ・・・ま、顔だけでも拝んどいてやるか。

「青樹、そんなに鼻息を荒くすんな。おが鬱々たてがみが靡なびいてるぞ。」

・・・つて、はあああああ？

キ・リ・ンですか？ それはさすがに、予想もしなかつたな・・・。

「そんなん、美人か？」

「な・・・美人じゃねーか！！ お前の目は、節穴か？」

その言葉、そつくりそのまま、お返しします…！

「俺、教室に戻るわ。」

「おお、オレはもう少し見てから、戻るよ。」

「へーい。」

俺はカラ返事をしながら、階段を降りた。

「はー、アイツと居ると、ホント疲れる。」

芯は良い奴なんだけどな。

「あの・・・。」

・・・なんて事を考えていると、後ろから声が掛った。

今度は何？今度こそ、犬……とか？

「何ですか？」

振り返ると、そこには女人人が立っていた。

「う……嘘、人間？」

「いいえ。」

黒くて長い髪に、形の整った顔。あまりの美しさに、見とれてしまつた。

りたい。

つて、そうじゃなくて……。

「今、なんて？」

「私は人間では、ありません。」

「え……。」

人間じゃない？

「宇宙からきました。」

「はあ、宇宙です……かああああああ？」

宇宙人？え、どうしよう、宇宙人まで見えるようになったのか、俺？

第3話 SF的な話になつてんですか? （SF）

「宇宙から、あなたを殺しにきました。」

「こ、殺し?」

女人はだんだんと、俺に近づいてくる。

逃げる!!

俺は戸惑いながらも、走つて逃げた。女人はすごいスピードで走つてくる。

「なぜにこ乱心ーー?」

と、叫びながら、全力疾走!!

の人・・・なんか、目からビーム出しそうなんだけど。
女人の目に、光が集まつてくる。

「ま、マジですかーー?」

野次馬がたくさん居る中、俺は職員室に向かつた。

「つか、見てねーで助ける、野次馬ーー!」

誰も助けてくれないのは、どうして? (話を作るのが、楽だからです。)

「ふざけんなよ、筆者ーー!」

ガラツ

「先生、助けてーー!」

誰も居なかつた。

「どうしてーー!」 (話を作るのが・・・以下略)

俺は運動場へ出た。女人がビームを発射したところから、変な地
球外生命物体が出てきている。

「ぎやああああーー!」

そうだ、青樹は?

俺は周りを見渡した。

「居たーー! 青・・・ーー!」

大木の下に、青樹とキリンが居た。

あの雰囲気は・・・。

「愛の告白とか、マジふざけんじゃねーぞーーー！」
さつきから、叫んでばっかで、喉が痛い。

俺は決心した。すべての怒りを、この一発に懸ける。

「スペシャルアップーカット！！」

右の拳が、女人の顎の下に直撃した。

「うう・・・。」

女人人は苦しそうな声を上げながら、地面に叩き付けられた。
なんかもう、ちがう話になつてねーか？

「人生で初めて、女人をグーで殴つてしまつた。」

でも、こんな簡単に終わるはずはない・・・と思つたんだが。
しばらく経つたも、まったく起きてくる気配がない。

「死んで・・・はないよな？」

と、女人の首筋に触れようとした瞬間・・・

ペカー

空から、飛行物体・・・ぶつちやけ、UFOが降りてきた。

第4話 田薬、いりますか？

「何か来たーーー！」

俺は空から降りてきたUFOを凝視した。

「ウイーン

変な音と共に、中から宇宙人（？）が出てきた。

「ツレテカエリマスネ。」

「へ・・・・。」

開いた口が塞がらないといつのは、こいつの事を言つんだな。

「ツレテカエリマスネ。」

「なんで2回、言つた？

「ああ、どうぞ。俺の物でも、何でもないんで。」

女の人は宇宙人に抱えられ、UFOの中に・・・・・？

ギロー！

・・・おもつきし睨んでるーーーおいおいおいおい、怖えーよーーー田、
充血してんじやんーーー

「ひ・・・・。」

女の人と宇宙人は俺を睨みながら、UFOで宇宙へ帰つていった。

「今までの、何だつたんだよーーー！」

俺は力が抜けて、へなへなと地面に座り込んだ。

「ん？前にも少し、似た様な事があつた気が・・・・。」

「斎富ーーー！大丈夫かーーー？変な音したぞ！？それより、聞いて！
！告白が上手く・・・・。」

俺はその声を聞いて・・・

「おつ前、ふざけんじやねーぞーーー俺が一生懸命、宇宙人と戦つて
いる時にーーー！」

キレた。

駆けてくる馬を蹴るーーーひたすら蹴る、殴るーーー

「イテテ・・・・何、すんだよ？」

「喋んな！！このクソ馬！！鬪をポーテールにしやがって！！シヤレのつもりか!? ウケねーんだよ！！せめて、御河童おかっぱにしろ！！」
俺は日頃のストレスを全部、青樹にぶちまけた。

青樹の鼻血に、太陽の光が反射して辺り一面、キラキラしている。
「綺麗だな・・・。」

心が洗われていくようだ・・・。馬を殴るなんて、良くないよな。
俺は散々殴つときながら、血塗れの青樹をほって家に帰つた。（何

が、心が洗われていく・・・だよ。）

「そりゃあ・・・あの宇宙人は、なんで俺を殺しにきたんだ？」

第5話 不良つて、ボランティアするの？

俺つて、可愛そうな奴だよな。宇宙人に殺されかけるなんて・・・。

「宇宙人に恨まれる様な事、したつけ？」

俺は自販機でジュースを買つていてとこひだつた。

「おはにょう（おはよひ）。」

おはにょう・・・？

俺は声のした方に、振り返つた。

「青樹・・・か？」

誰か分からなかつた。だつて、顔が包帯でぐるぐる巻きで、鼻にティッシュが詰め込まれていたんだぜ？・・・つて、俺の所為なんだけど。

「えつと・・・昨日は悪かつたな、色々と。」

「べふにひひつへはんふらひ（別にいってあの位）。」

何言つてるか、分かんねえ。

「お、お詫びに奢るよ。何がいい？」

俺は罪悪感を感じ、せめてものお詫びとして、ジュースを奢る事にした。

「ひやあ・・・ひやはいひゅーひゅ（じやあ・・・野菜ジュース）。」

「

馬だから？

「分かつた。野菜ジュース・・・つと。」

「おい、ちんたらしてんじやねーぞ。」

何処から、低い声がした。なんか、喋り方からして不良っぽい。

今度は何か？ジャガーとかか？

俺は後ろを振り返つた。

「あれ？何処に・・・？」

何かが足に触つた。

「何？」

足元を見てみると・・・

「か、可愛い！！」

ハムスターが俺の靴の上に、乗つかっていた。
この人絶対、いい人だ。不良だけど実は、海のゴミ拾いとか、募金とかしてるとかしてるタイプだ。

「は、ひょうひまひえんひやひ（あ、條島先輩）。

「青樹、知つてんの？」

「ふん！！ひよのひやつひよーへひひひやんふひよいふひよふふん
はんほ、ひーはーはつへ！！（うん！！この学校でいちばん強い不
良軍団の、リーダーだつて！！）」

いちばん強い？

「ふ・・・くくく。」

やばい、笑いが抑え切れない。

「笑つてんじやねー！！！」

條島先輩はそう言い残して、その場から去つていった。
あ・・・また何か、起こうたりして。

第6話 犬神様のおなーりー・・・・!?

やつぱり・・・。

予想が的中した事に、溜息を吐いた。

俺は今、不良達に絡まれています。

「おいおい、兄ちゃん。よくも俺等のリーダーを馬鹿にしてくれたのよ。」

と言つても、全然怖くないんですが・・・。

「おい、何とか言えや、我!!」

こんなに可愛いハムスター達を目の前に、怖がる人はそろそろ居ない・・・と思う。取り敢えず、謝つとくか?

「申し訳、御座いやせんでした!! 兄貴!!」

とでも言つて描こう。面倒くさいし。

「だからもう・・・。」

帰らせて下さい。

「おお!! 分かってるやないか!!」

は?

「よし、気に入つた!! 俺の仲間になれ!!」

うわああああああああ!! 余計、面倒くさい事になつた。

「冗談やめえええええええええええええ!!」

疲れた・・・。

なんとか逃れたけど、また来るかも。ハムスターって結構、足が速いんだな。

俺は家に向かっていた。

あ、犬が目の前を走つて・・・ ああ?

「思い出した!!」

人が動物に見える様になつた理由。そつだ!! あの時・・・

（回想）

「今日から新学期か・・・。」

俺が道を歩いていた時だった。そう、空から・・・えーと、何だけ？

ワン！！

そう、そうー！犬が降ってきた。（えええええええ・・・。）

「・・・なんで犬が降つてくるんだ？」

俺はその犬を受け止め、其処ら辺にあつたゴミ箱に捨てた。そしたらゴミ箱の中から、いきなり手を掴まれたんだ。

「んだよ、この犬！氣持ち悪い！ー！」

俺は驚いて、そいつの手を払い除けた。

「呪つてやる。」

犬が喋ったー！

俺は夢でも見ているのかと、自分の頬を抓つた。

普通に、痛いんだけど。

「夢じや・・・ない？」

第7話 再び・・・目薬、いりますか？

犬が俺を、充血した目で睨んでる。

そうだ、此処だ。此処が宇宙人の時の（第4話参照）と似ているんだ。

「私は・・・」

「何だ！？また喋り出した！？」

「わしは犬神と申す者じや。」

「い、犬神だ？」

「いいいいい犬神がどうして・・・。」

「様！！」

チツ（舌打ち）

「犬神様の様な人が、どうしてこんな所に落ちてこられたのですか？」

犬は俺を指差した。

「お前、さつき何をした？」

無視かよ。

「さつき！！」

足でも踏み外したんだな。・・・何から？雲？

「捨てた。」

「そうだろう？この、犬神様を捨てたのだ！！」

俺様キヤラかよ。てか、もうチツ「むのも面倒くさくなってきた。

「あー・・・はい、はい。」

「これが、どういう事が分かつておるのか？」

知るかよ。

「動物虐待だ。」

「そーですね、すいませんでした。」

「俺は呆れて、頭を抱えた。」

「謝つただけでは、済まされんぞ！？覚えておれよ！？死ぬまで、

呪い続けてやる。」

犬はそう言いながら、空へと戻つていった。」回想終了」
「・・・と、そういう事があつて、そう。その次の日からだつた、この世界が変わつたのは。今思つと、あの犬は本当に犬神様だつたのかもしれない。（信じてなかつたんだ。）

俺は家に着いてすぐ、ベッドに横になつた。

「あの犬捕まえたら、普通の日常に戻れつかな？」
俺は日曜日の朝、あの犬に会つた場所に向かつた。

「やつぱり、簡単には会えねえよな。」

ゴミ箱覗いたら、帰る。」

パカッ

「どうも。」

俺は即座に、蓋を閉めた。

「・・・どうしよう。」

パカッ

「なんで、閉めるんじや。」

閉めた。

「マジかよ。」

やつぱり、今日は帰るつー！

「なぜに、閉めるんじやー！？」

犬が俺に、飛び掛かつてきた。

「何もこんなに早くに、見つかる必要ねーだろー！」

「何を言つー！楽させてやつたのじやー！感謝しろ。」

「どうせ、また捨てられたんだろー！？」

「・・・違うわいー！」

図星かよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0395f/>

アニマル ワンダフルライフ

2011年1月2日14時34分発行